

「研究テーマ」

新聞から考える ～伝える力の育成 実践指定校2年目を迎えて～

園田学園中学校・高等学校

校長 熊谷 年夫

教諭 本田 有加子

1、はじめに

昨年度、実践指定校としての認定を受け、校内に「NIE 推進委員会」を設置した。その結果、教科の枠を超えて様々な活動を行うことができた。

1年目に実施したものに、中学校での「NIE コンテスト」や、高校1年生で取り寄せた「世界史新聞コンテスト」があるが、いずれも新聞を身近に感じさせる良い契機となった。

派遣記者による講演「新聞ができるまで」を通しては、記事を構築していく上での発想の広がりや内容の豊かさにつながっていると感じたことで、実際に生徒たちは新聞を制作する際に総合的な学びの姿勢を持ちながら臨むことができた。

もちろん、いずれの取り組みも初めてであり、開催時期や対象生徒については、いくつかの課題点があったため、それらを確認して、今年度の NIE 活動をスタートさせることとした。

以下、企画提起し、実践した内容を報告する。

2、実践内容

(i) 新聞の配置

昨年度と同様に、中学校では全学年で取り組むこととして、新聞の設置場所を放課後等に自学習を行う「SPルーム（ステップアップルーム・プッシュアップルーム）」にした。高校でも、特別進学コースの1・2年の各教室に新聞を配置した。

週末や祝日を挟むと、新聞が溜まることは否めなかったが、新聞を取りに行く担当者を決めるなどして、スムーズに行うことができた。

(ii) 中学校の実践内容〈対象：全学年〉

2学期末から始める、新聞で新聞をつくる「NIE コンテスト」に向けて、まずは講演会を設けた。産経新聞社阪神支局の吉田智香記者（写真1）に来校いただき、次のような話をうかがった。

- ・ 新聞記者の仕事
- ・ 新聞記者の必需品
- ・ 新聞の構成

- ・ニュースとは
- ・記事の書き方
- ・新聞ができるまで

特に、本校の中学生たちは、新聞で新聞をつくるコンテストに取り組むこともあり、「新聞作りのポイント」に焦点を合わせた内容に、メモを取りながら聞き入っていた（写真2）。



（写真1）



（写真2）

出来事を分かりやすく伝えることはもちろんだが、文章を「結論、詳しい内容、出来事の経過」の順に逆三角形で書けば、読み手に伝える際に効果が上がると教わり、情報の提示の仕方に工夫がなされていることを、それぞれが学んだ。

生徒の講演の感想には、「見出しを書く役割があり、見出しが大事であることを知った」というものに始まり、取材を行う上で最も大事なことは、「相手との信頼関係である」と書いているものが目立った。

それは、新聞記者の仕事の基本が、何よりも、「人に話を聞いて、記事を書く」ことだと言う吉田記者の話が基調となっていたからであり、そのためには、相手との信頼関係が大切であることを、講演を通して学んだからである。また、そうした姿勢は、取材に限らず、日常生活においても大切であり、講演から多くの気づきを得ることができたようである。講演後には、生徒が実際にインタビューを受け、後日それが記事になったことで、「新聞づくりのポイント」を一層感じる機会が得られた（写真3）。



（写真3）

昨年度と同様に、「NIE コンテスト」を実施し、それぞれの新聞に応じて、表彰を行った。

(ii) 高校の実践内容①

〈対象：高校1年生 全コース〉

昨年度、高校1年生の進学コース「世界史B」の授業において「世界史新聞」を制作させる課題に取り組みさせた。同じ出来事を取り上げて記事を書くにしても、肯定的見解・否定的見解があり、互いの論点がどこにあるのかを感じ取ることができた。また、実際の新聞を手にして、そのレイアウトを意識することで、実際に自分たちが制作する際に読み手を意識した工夫をするなど、それぞれの表現力がそこに表れていた。

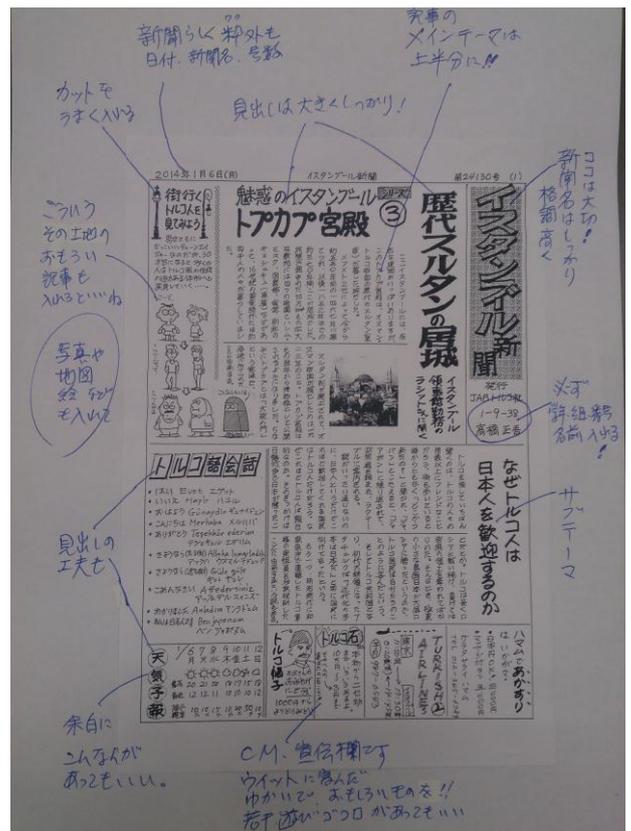
前年の結果を踏まえて、本年度もコンテストを実施することにしたが、3コース全てで取り組ませたいという観点から、以下のように科目を超えた設定を行った。

高1：社会	
進学コース	→「世界史新聞」
特進コース	
総合コース	→「地理新聞」
① 12月期末考査後「要項プリント」を配布 (B4用紙、「地理」は方眼紙)	
② 冬休みの課題として取り組ませる	
③ 1月末からコンテストを実施	
→ 生徒投票で各クラス2～5人選出	
* コースの人数に応じて調整を行う	
→ 選出後、教員による投票	
→ 学年朝礼で表彰	

「世界史新聞」では、人物や出来事に焦点を合わせて書くため、そのイメージを持ちやすいが、「地理新聞」は初めての試みであり、教員から一応の見本を提示した(写真4・5)。



(写真4)



(写真5)

新聞意識的触触を機会減減るききける
 いるもあもあ新聞新聞制制備段階段階新聞新聞之
 はいとどうもからか可察な読者説明を行うて
 完成イ完成ジを抱がせ抱かせるよたにした。

「世界史新聞」(写真6)と同様のレイアウトだが、書かれている記事内容は、一つの国の持つ歴史や伝統、言語についてであり、それぞれの興味関心が投影されたものになった。

「何に興味を持つか」という契機に始まり、「どう調べるか」、そして「伝えるに必要な形式になっているか」までが新聞制作には必要であり、発想の広がり求められた。



(写真6)

(iii) 高校の実践内容②

〈対象：高校2・3年生 理系クラス〉

朝日新聞「天声人語」を用いて、3回ほど問題形式のプリントを作成し、取り組ませた。評論に慣れる狙いもちろんあるが、社会に関心を持たせることも視野に入れ、周辺の出来事も織り交ぜながら読解問題に挑戦をさせた。説明が無ければ分かりにくい内容の場合もあり、ただ単純に問題を解く作業に終始させず、話題の広がりを持たせることで、考えさせることや意見交換の時間も置いた。こうした実践も、より社会に関心を持たせる一つの方法であると感じた。

3、成果と課題

実践指定校2年目を迎え、昨年度の成果に改善点を加えることで、より一層充実した内容となるように工夫をした。

生徒は、年々、新聞を購読して読む機会が減っていることもあり、新聞のレイアウトや記事、朝刊と夕刊の違いについて話題を展開させると、関心を持って話を聞いていた。また、新聞があっても進んで読むことはほとんどないという生徒もおり、こちらからの話題提供やその機会を設けることが不可欠であると感じた。

また、現代文で言えば、問題読解に終始してテクニックは身に付いても、小論文を書く際に必要な知識や語彙に乏しいため、折に触れて新聞を通じて興味喚起や語彙量を増やさせることは必要である。実際に、新聞を作ってみると、どうすれば読み手に自分の思いが伝わるのかを考える契機にもなり、言葉を調べるなどこちらの意図が伝わる形で、様々な企画に生徒は臨むことができたと感じている。

実践指定校としての2年目は終わるが、こうした取り組みを続けていくことで、生徒の「考える力」の育成を目指したい。